

九州大学

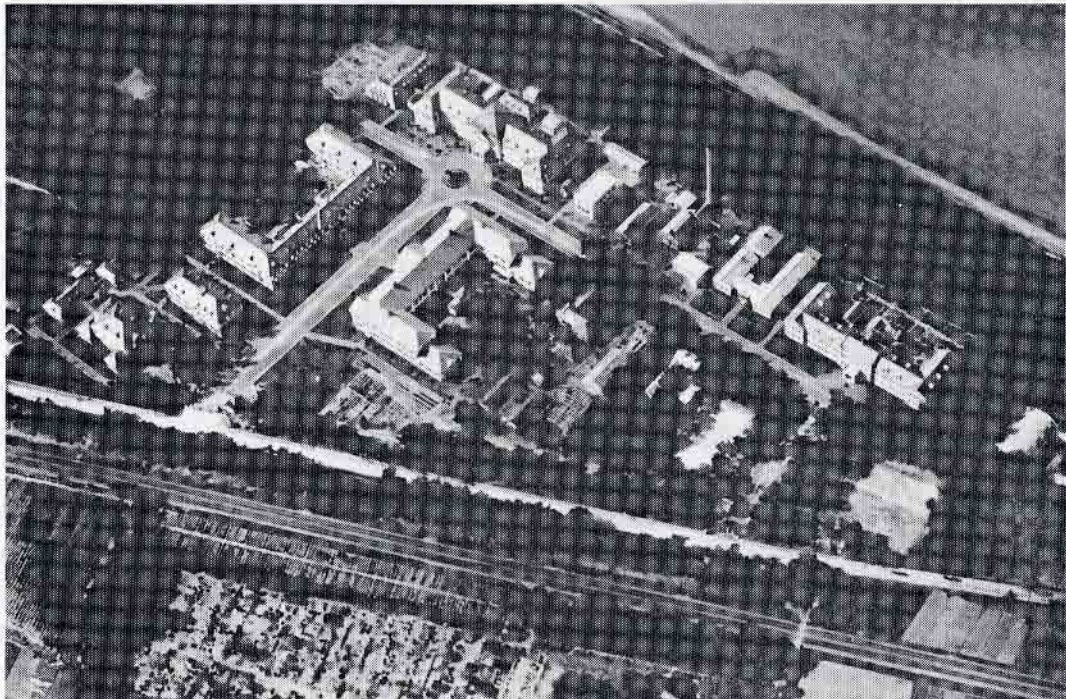
大学史料室ニュース

第6号

1995.9.20.

目 次

千代の松原	2
史料紹介(6)	4
沿革史紹介(5)	6
受贈図書一覧	7
大学史料室日誌抄録	8



上空より見た農学部構内(1927年頃)

九州帝国大学農学部は、東京帝国大学、北海道帝国大学に次いで、わが国で三番目に創設された農学部であった。官制上の設置は1919年(大正8)2月、勅令第13号をもってなされたが、実際の開講は2年後の1921年(大正10)4月である。上の写真は、白砂青松の地—北側に博多湾をのぞんだ松林の中に開設された農学部の、創立当初の姿を伝える貴重な写真である。1927年(昭和2)3月に竣工した農芸化学実験室が写っており、また翌28年に竣工したと思われる農学科教室定温温室や、林学附属実験室の増築がまだ見えないので、おそらくは1927年(昭和2)頃に撮影されたものと推測される。

5月19日、大学史料室の折田さんから「大学史料室ニュース」に原稿依頼の電話があった。大学の歴史や資料、大学時代の思い出などであればよいということである。学生3年、教員29年、現役の大半を九大で過した身として思い出はいろいろある。薄らいだ記憶をたどり、感想を含めて思いつくまゝに記して見たい。農学部在籍していたので、その一隅から眺めたものになること、また記憶に誤りがあるかも知れないがお許し頂く他はない。そして元より拙文、お役に立てば望外の幸せである。

私が九大に赴任して来たのは1946年6月初めのことである。発令は4月1日付であったが「……タンシフニンセヨ」という電報を前任地仙台で受取ったのが5月29日、2月近くも遅れていた。官吏は発令から2週間以内に赴任することになっていたのに、明らかに違反していたが、お咎めは何もなかった。行政機能はまだ混乱期を脱していなかったようである。当時は汽車の乗車券購入や旅行中の食糧の手当など今日では考えられないような準備が必要であり、それに手間取ったが、ようやくのことで博多駅に降り立って見ると、駅前から呉服町、中洲、石城町の一带は一面、瓦礫の散乱する焼野原に変わり、ところどころに小屋、カボチャやサツマイモの蔓が見える、何処の戦災地にも見られた殺伐とした風景である。しかし箱崎の町や九大キャンパスは無傷のまゝに残っていた。単身赴任の意味はすぐに分った。住宅事情が極度に深刻だったのである。戦災で家を失い、或は疎開地から戻る家がないまゝに遠方から通勤している教職員も少なくなく、学内の物置小屋や用務員室で不自由な生活をしている人もいるような状態である。早速、二、三の知人を訪ねては見たが貸家はおろか、貸間さえ見込みは全くない。私は実験室の片隅に椅子を並べ、ベッド代りにして夜を過ごすことにした。幸い暖かい季節であり、それに気が張っていたのか、1月以上もこの状態で過したが、この時の苦痛は殆んど記憶にない。

10年振りの農芸化学教室は初めて見る三階建ビルに仮教室から移っていたが、恩師、先輩、顔見知りの事務の人びともおり、故郷に帰ったような安堵感があった。しかし何となく空気が穏やかで

ないように感じられる。間もなく、それは刷新と称する嵐が学内に吹き荒れているためと分った。占領軍の命令によって教職員の思想審査委員会なるものが設置され、それを農学部では刷新協議会が引継ぎ、同僚同士の告発とも取れる投書が行なわれ、その信憑性を審議している最中だったのである。ほどなく審査の結果が教授助教授会に報告され、討議、採決の結果、最終的に一人の教官に対して辞任を勧告することになった。当時の占領軍の命令は絶対的であったので、この処置は已むを得ないものではあったが、これに当たった委員、学部長、学科委員など関係者の苦悩は察するに余りがあった。この後遺症はかなり後まで尾を引いたようであった。

戦後の混乱は諸制度の変革でもあった。これまで小学校（国民学校）6年、中学校5年、高等学校3年、大学3年の修業年限、いわゆる6・5・3・3制が6・3・3・4制に変更になった。これまでの制度のどこに不備があり、新しい制度の理念はどういうものか一般の国民には知らされないうまゝにである。これまでの制度を一新することに意義があったのかも知れない。そして全ての都道府県に国立の新制総合大学が設立された。これは教育の機会均等、民主化に関係があるとでもいうのであろうか。九州帝国大学では福岡高等学校と久留米工業専門学校を合併して新制の九州大学となり、六本松と久留米の分校において2年間の教養課程を修め、学部に進学して2年間の専門課程を終える制度になった。従来3年間をかけた授業内容を2年間に凝縮することは容易ではない。この困惑は恐らく新旧制度における教育理念の相違を十分に理解していなかったためではないかと思われる。

そのうちに朝鮮戦争が勃発した。板付空港を離陸した米軍機が2機編隊で猛烈な爆音と共にキャンパス上空を屋上すれすれと思われるほどの低空飛行で玄界灘に消えてゆく。最盛期には2時間の講義中数回ということもあった。その都度、講義の中断である。大戦末期、グラマン戦闘機に襲撃された悪夢の再現のようである。その頃のことであった。東京の級友から「まだ松露はあるか」という添え書の便りがあった。彼は卒業（1936）以

来、母校を訪れたことが一度もなかったようである。ましてキャンパスの現況は知る由もない。東京人にとって九大キャンパスの松露は一番印象深く残っていたのかも知れない。

私たちが九州帝国大学農学部農芸化学科に入学したのは1933年4月のことである。九大入学生一同（法文、医、工、農）は工学部本館の大講堂で松浦総長から、諸君は本日から紳士である、よろしく自戒自律、学生の本分を完うするようにとの趣旨の訓辞を受け、続いて夫それぞれの学部長の前に進み出て毛筆で宣誓書に署名した。名簿はイロハ順であり、私はクラスの終り近くに呼ばれて署名したが緊張して筆を握ったことを覚えている。当時の総合大学は九州ではただ1校、全国にも他に国立5校、私立数校が東京と京阪神にあるに過ぎず、大学の卒業生（学士）に対する社会の期待は大きく、それが総長の紳士としての自覚という言葉になったのではないだろうか。

この当時、鹿児島本線下り列車は名島の鉄橋を渡るとすぐ松林に突入した。松は揃って大きい。千代の松原である。程なく右手に国道が現われ、それに沿って農学部の外柵、続いて正門が見え、さらに工学部の外柵が見え隠れする。鉄道は国道から次第に離れてゆくが、その間の桑畑、墓地、人家などの間にも松の大木が真直ぐに、或は傾いたまゝ、点々と立ち、米一丸の供養塔辺りまで続いていた。

箱崎キャンパスは平坦な砂地で、構内の至るところに松があった。とくに西側湾鉄との境に沿っては南から北の端まで帯状の松林であった。キャンパスのほぼ中央、工学部運動場の西側一帯はまとまった深い松林でその奥に隠れて軍事教練用の狭窄射撃場が湾鉄との境界近くにあった。級友が松露を見つけたのはこの辺りであったかも知れない。農芸化学教室は火災で焼失し、4棟の仮教室に分れていたが、それら建物の間にも屋根と高さを競うほどの松の大木が何本か残っていた。そしてその裏（南側）から工学部運動場の西、狭窄射撃場にかけての一带は密林であった（写真）。箱崎キャンパスは千代の松原と共存、というよりもそれに包まれていたのである。

キャンパスは至極く静穏であった。時どき裏を通る湾鉄電車のレールを軋む鋭い音が響く他、騒音は全くない。湾鉄の海側は広い埋立地になっていた。防潮堤は現在の国道3号線か、もう少し先であったかも知れない。工事が終わったばかりと見え、処どころに水溜りのある、不毛の砂礫地であ



農芸化学仮教室裏の松林（1935.10）

った。防潮堤の北方は博多湾の静かな海の向うに西戸崎から奈多に至る長ながと続く白砂の海の中道、その右手前の名島発電所の煙突はいつ見ても黒煙を上げている。昼休に埋立地に出て防潮堤にもたれ、波静かな博多湾の海を幾度眺めたことであろう。学生にとって博多湾は心情的にはキャンパスの一部であった。

名島橋を渡り、川岸を下ると名島神社の鳥居近くの河口の岸にヨット部の艇庫があった。キャンパスから徒歩20分位の距離である。河口浅瀬の海苔養殖竹の間の水路を抜けて博多湾に出ると、正面に頂きの平らな能古島、その右に志賀島、その間の狭い水路のはるか向うに小さく、三角状の玄界島が見える。湾の中ほどに出て振り返れば、千代の松原が低く、長ながと延び、その上に大学の屋根が見え隠れ、右に少し離れて宮崎宮の大鳥居が海辺に浮ぶ。さらに右、博多港の先に西公園の丘が海に突出し、その前の小さい鶴来島、百道の砂浜、姪浜の小さいボタ山、生の松原も見える。市街地の背後は犬鳴、若杉、砥石、三郡、宝満、九千部、脊振、金山などの山々がどっしりと並んで座っている。学生にとって山に海に、休日のリクリエーションの場にこと欠くことはない。

60年前、キャンパスで見た千代の松原の無数の松はいま何本残っているだろうか。松林はビルの新築でまとめて伐採されて消え、或は松喰虫によって枯れ、台風で折れ、今や千代の松原は痕跡をわずかに残すだけになっている。海面の埋立によって海岸から離れ、ビルに囲まれた松林の運命は見えている。これは発展ということであろうか。箱崎キャンパスは西区元岡の方に移転の計画があるようである。今度のキャンパスは永遠であるように、OBの一人として希望して止まない。

（九州大学名誉教授）

九州大学学生案内

学生案内は、九州大学に合格した新生が、おそらくは最初に手にする大学刊行物の1つであろう。受験という関門を突破し、これからの生活に新たな意義を見出そうとしている学生たちにとって、教養部・学部での学生生活、課外活動の紹介を主な内容とする九州大学学生案内は、入学前に受験雑誌等で得ていた知識とはまた異なった、より実際的な情報を提供する刊行物である。その意味でこの学生案内は、新生のためのガイドブックであると同時に、九州大学の学生(生活)の歴史を知りうる貴重な歴史史料でもある。

現在、大学史料室には、全冊ではないが、1949年(昭和24)～1995年(平成7)の学生案内が所蔵されている。戦中期、九州大学はこの学生案内に類する刊行物として、『九州帝国大学学生便覧』を発行していたが、これは所収されている「在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ伴フ臨時規程」「体力章検定」「教練及兵事要項」等の諸規程からもわかるように、実体は戦時体制に即応した規則集であった。このような戦前の『学生便覧』に比べれば、戦後創刊された『学生案内』の内容は、以下に見るように実に多彩である。学生部所蔵のものも参考にしながら、今回はこの学生案内の紹介

を行ってみたい。

九州大学の学生案内は、1949年(昭和24)4月に刊行された『九州大学学生案内』が最初のものであった(左写真)。大きさはB6判、縦書き、30頁。編集・発行は学生部。内容は「一、大学沿革の要及び歴代総長 二、組織及び概況 三、附属施設 四、図書館 五、学生部機構 六、学友会 七、その他」の7部からなるが、例えば「六、学友会」や、「七、その他」の学内建物平面図等は、ほかには見られない貴重な史料である。また同書の巻末には「本案内の作製に当つて」というあとがきがあり、そこには学生案内創刊の理由が記されている。戦後の混乱期にあった大学の様子も窺い知れる史料だと思われるので、少し長くなるが、下にその冒頭部分の引用をしておこう。

現在我国の学校は全く手のつけ様も無い程不安な過渡期的様相を呈している。六月になれば新制大学が出来ると云う。こんな時期に入学して来た学生は本当に気の毒に思えて仕方がない。自分は一体どうしたら良いのか、自分の入つて来た大学の機構は一体どんな風になつて居るのか、いろんな事が尋ねたいが何處へ行つて聞いたら良いのか等々、きつと新しい入学生の諸兄弟は迷つておられると思う。此の案内は少しでもこうした悩みを少くし様という願いから生れ出たものである。(後略)

1949年(昭和24)に創刊された『案内』は、翌50年にも刊行されたが、旧制の入学者がいなくなった翌々年(1951)には、縦書きが横書きとなり、掲載項目も総長・教養部長・学生部長挨拶、学年暦、事務機構図、教養部・学部の学科表(履修規程)、学費等に関する統計が追加されて、頁数は全86頁と増加した(右頁写真左)。なかでも学科表(履修規程)は、1949年(昭和24)に発足した教養部を始めとして、各学部の履修科目・時間・単位数等を50頁にわたって収録しており、新たに始まった新制大学の教育体制に対応した編成である。

この形の『案内』は、1953年(昭和28)頃から、各学部の紹介等に写真を多く取り入れるようになり、また1955年(昭和30)版からは、タイトルが『九州大学学生案内』から『学生案内』に改題されて、1957年(昭和32)まで刊行された。印刷状況が厳しかった昭和20年代を通じて刊行され続けた本学の刊行物は、この学生案内と、戦時中にも



『九州大学学生案内 昭和二十四年』

出版の途絶えなかった『九州大学時報』ぐらいである。このことは、本『案内』が大学にとっていかに必要な刊行物であったかを示しているとともに、教職員一丸となって編集に当たった学生部の尽力を物語るものであろう。

ついで、印刷状況が好転した1958年（昭和33）には、『案内』は写真（右段写真中）のように、A5判、全92頁と大型化し、印刷用紙にはアート紙が用いられるようになった。掲載項目の方も、前年（1957）に改編されたものを引き継ぎ、学生生活、学習、学資、課外活動等についての紹介が行われているが、「課外活動」の一部として「自治会活動」の説明が入れられるようになったことは（1957年）、注目される。

以後このA5判の『案内』は、生活協同組合（1961年）、工業教員養成所（1962年）、学生会館（1964年）と、掲載項目を増やしながら毎年刊行が続けられた。そして昭和40年代になると、「沿革、学生部、教養部、学部、附属施設等、経済生活、学生のための施設、健康、課外活動、学園スナップ、生活協同組合、就職、付録、学生歌、福岡市案内図、附表」と、目次も現行のものとはほぼ同じになり（1966年）、「課外活動」（文化・体育サークル）の紹介や、学友会会則等の規則を収録した「附録」の頁が、大幅に増加された。

ただし、1968年（昭和43）から始まった、いわゆる大学紛争は、『案内』の編成には直接的な影響をほとんど与えておらず、わずかに翌69年版で、「外国人留学生のための案内」と主な施設等の電話番号・所在地が追加され、臨時的な措置として、巻頭の総長挨拶が学生部長挨拶に変更された程度であった（70年からは、総長、学生部長2名の挨拶となる）。この点は、学生部を始めとする大学全体が、実際の「紛争」処理に忙殺されていたことと、おそらく無関係ではなからう。

しかし、「紛争」の影響も一段落した1974年（昭和49）には、「課外活動」中のサークル紹介が、学生側の提出するクラブ別の紹介記事から、学生部で調製する一覧表形式となって、『案内』の内容に大きな変更をもたらした。この結果、従来同書の主要部分を占めていたサークル紹介は、前年の37頁から8頁に圧縮され、全体的にも165頁から124頁と、約四分の三の分量になっている。



『学生案内』左より1951年、58年、88年。

その後この『案内』は、形式・内容（文章）ともにほとんど変えられることなく、1987年（昭和62）まで14年間にわたって刊行されたが、翌88年には久しぶりの改編が行われ、見返りや扉に、大学や市内のカラー写真が取り入れられるようになった（A5判、全173頁。上写真右）。また時代状況の変化に伴い、目次、内容についても若干の変更がなされ、1961年（昭和36）以来続いてきた「生活協同組合」の項目が削られる一方、従来の「外国人留学生のための案内」の項目が「国際交流」と変わって、「学生の海外留学」が追加されたほか、「就職」の項目にも新たに「国家試験・資格一覧表」が入れられた。各中扉の裏に、「コンパでの飲みすぎに注意しよう」「落とし物・忘れ物に注意しよう」「サラ金には絶体手を出さないようにしよう」等の標題のもと、細かい注意書きが書かれるようになったのも、今回の改編からである。

これ以降、1993年（平成5）までの『案内』には、キャンパスのイラストマップ（1988年）や、「学生バッチの由来」（1990年）が入り、「学部等」の項目に、言語文化部（1992年）や医療技術短期大学部（1993年）が加わったぐらいで大きな変化は見られない。

しかし昨年、教養部が廃止になると、「外国語」「人文科学」「社会科学」「自然科学」「保健体育」といった教養課程についての説明は無くなり、「教養部」の項目は「全学共通教育と六本松キャンパス」と改題された（1994年）。さらに本年版では、従来の「学部等」の項目が「学部・研究科等」と変わり、新入生向けの『案内』にも、文学部・文学研究科以下、各大学院研究科に関する情報が取り入れられるようになった。（〇）

沿革史紹介（5）

九州大学医療技術短期大学部二十年記念誌

1993年12月刊行。B5判。横書き。234頁。九州大学医療技術短期大学部創立二十周年記念事業会発行。

本誌は口絵写真集、第1編九州大学医療技術短期大学部20年史、第2編九州大学医療技術短期大学部20周年記念事業、第3編九州大学医療技術短期大学部資料・年表の3部からなるが、あとがきにも「表題は記念誌とするが、内容的には年史が中心」とあるように、第1編「20年史」の部分が、全体の3分の2以上を占める編成となっている。

内容は、第1編には看護学校、助産婦学校、診療放射線技師学校、衛生検査技師学校の創立前史から、1991年3月までの医療技術短期大学部の歴史が詳細に記述されているほか、学生生活や今後の医療技術教育の重要性等についても言及がなされている。第2編には記念事業・行事の記録が所収され、第3編には歴代部長（主事）、元教官、歴代主任会委員・学務委員会委員等の主要人事・委員の変遷や、卒業生の活動分野、年譜、学則等の資料が収録されている。

五十年史 — 九州大学温泉治療学研究所

1982年3月刊行。B5判。横書き二段組。211頁。九州大学温泉治療学研究所創立五十周年記念事業後援会発行。

温泉治療学研究所は、1931年11月、九州大学最初の附置研究所として、大分県別府市郊外の鶴見原の地に、地元別府市等の協力によって設置されたもので、わが国の温泉医学研究の草分け的存在であった。本誌は、この温泉治療学研究所の創立50周年を記念して編纂されたが、1982年4月、同研究所は、新たに生体防御医学研究所の一部として改組されることになり、結果的には本『五十年史』で、温泉治療学研究所の全史が記述されることになった。

内容は、第1編通史、第2編部門史、第3編附属病院史、第4編関連施設史、第5編研究業績の5部から構成されている。口絵写真に創設当時の写真が数多く所収されているほか、第1編通史には、一部分ではあるが「温泉治療学研究所誌」等の貴重な史料も収録されている。

自由の学燈をかがけて

— 九州大学法学部六十年のあゆみ —

1984年11月刊行。A5判。縦書き二段組。78頁。九州大学法学部創立60周年記念事業会発行。

1924年9月、九州帝国大学に法文学部が創設された。九州大学法学部は、戦後の1949年4月、この法文学部から独立して発足したものである。

本誌は、法学部の母体となった法文学部創設60周年を記念して編集されたもので、「法学部六十年を振りかえる」「教壇に立って」「わが青春を語る」の3部から構成されている。

「法学部六十年を振りかえる」には、1924年の発足から、1984年に至る60年間の歩みが、「創設波乱期—一九二四（大正十三）年九月—一九三〇（昭和五）年三月—」「戦後再出発期—一九四五（昭和二十）年八月—一九四九（昭和二十四）年三月—」等の7つの時期に分けて記述され、同時に「研究と講義」として、法学部各講座の現況が簡略に紹介されている。また、「教壇に立って」、「わが青春を語る」には、それぞれ教師、卒業生の立場からの思い出が綴られている。

九州大学工学部七十年史

1979年11月刊行。A5判。縦書き。1017頁。教育文化出版発行。

九州大学工学部は、1911年1月、九州帝国大学工科大学として創設された。本誌は創立から1979年までの工学部の歴史を収録しているが、民間業者に依託して編集を行ったという点に、この年史の大きな特徴がある。そのため、九大関係のほとんどの記述は、『九州大学五十年史』を基調としている。ただし、わが国の工業教育の展開を踏まえ、また歴代の学部長ごとにまとめて書かれているので、九大工学部70年の歩みを通覧するには、理解しやすい読物となっている。

内容は、第1章わが国における工業専門教育の展開、第2章九州帝国大学工科大学設立の沿革、第3章九州帝国大学工科大学、第4章九州帝国大学工学部、第5章戦時下の学園、第6章学制改革と新制大学の発足、第7章九州大学工学部の変遷、第8章九州大学工学部の現況の8部から構成されている。（Y）

受贈図書一覧(1995年1月～6月)

甲寅会誌 第52号、第54号、第57号～第60号	立正大学学園企画広報室(大学史編纂室)
甲寅会 1978. 2～1995. 2	1995. 3
平成5年度 会員名簿	拓殖大学創立百周年ニュース 第3号
甲寅会	創立百周年記念事業事務室 1995. 3
サティア《あるがまま》 第17号、第18号	明治大学史紀要 第一三号
東洋大学井上円了記念学術センター	明治大学百年史編纂委員会 1995. 3
1995. 1、1995. 4	川島健治郎教授退官記念誌
あ・若き日の栄光は 一七高時代回顧一	川島健治郎教授退官記念事業会 1995. 3
山口宗之 1988. 7	八重山群島学術調査報告 第1集、第2集(九州
九州帝国大学記念絵葉書帖	大学海外学術調査委員会学術報告 第1号、第2
九州帝国大学 1922. 3	号)
九州帝国大学写真帖	九州大学 1963. 7、1964. 6
九州帝国大学 1920. 4	Seinan Yesterday & Today POST CARDS
九州帝国大学要覧	西南学院
九州帝国大学 1916.11	学士鍋 第63号、第75号、第77号～第78号、第81
配置図	号～第91号、第93号
九州大学	九州大学医学部同窓会 1987. 6～1994.12
追悼集 VII-同志社人物誌 補遺・総索引	関西学院大学社会学部三十年史
同志社社史資料室 1994.12	関西学院大学社会学部 1995. 3
筑後文献目録 久留米大学出版物紀要(1)	学院史料 第13号
久留米大学文学部日本文化コース 1995. 3	神戸女学院史料室 1995. 3
筑後文献目録 郷土史研究会会誌(1)	西南学院七十年史 上巻、下巻
久留米大学文学部日本文化コース 1995. 3	西南学院 1986. 4
固体表面の物理 一表面新物質相一	旧華族家史料所在調査報告書
吉森昭夫・村田好正・八木克道編 1992. 2	学習院大学史料館 1993. 3
Proceedings of Yamada Conference X X VI on	聴取り調査：外地の進学体験(II) 台北一師附小、
SURFACE AS A NEW MATERIAL	台北高校、台北帝大医学部を経て、台湾大学医学
A. Yoshimori, Y. Murata, K. Yagi	院卒業
Technical Report A MANUAL OF THE MSX α	所澤 潤(聴取り・解説・註)、張 寛敏(口
PROGRAM: VERSION II	述) 1995
S. KATSUKI, M. KLOBUKOWSKI, P. PALTING,	手紙で見る新島襄の生涯
AND S. HUZINAGA 1980	同志社社史資料室 1995. 6
初等力学	福岡大空襲50周年 語りつぎー6.19平和のための
甲木伸一 1995. 3	福岡女性のつどいー
初等力学演習150題〔第2版〕	福岡婦人団体交流会 1995. 6
甲木伸一 1993. 3	蘇峰自伝(復刻版)
マインツ断章	同志社社史資料室 1995. 1
岡 増一郎 1995. 3	大学アーカイヴズ No.12
神奈川大学史資料集 第十一集 横浜専門学校会	東日本大学史連絡協議会 1995. 3
議録(二)	広大フォーラム No.306～No.316
神奈川大学 1995. 2	広島大学広報委員会 1993. 7～1994.12
広島県立文書館だより 第5号	同志社時報 No.98
広島県立文書館 1995. 3	同志社 1994.11
立正大学史資料集 第一集	

大学史料室日誌抄録 (1995年1月～6月)

- | | | | |
|----------|--|----------|---|
| 1. 9 (月) | 文学部国史学研究室より史料寄贈。 | 3.28 (火) | 『大学史料叢書』第3輯、『大学史料室ニュース』第5号発送(～30日)。 |
| 1.19 (木) | 第11回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
平成7年度大学史料室教官定員運用要望書提出。 | 3.30 (木) | 平成8年度概算要求事項表提出。
文学部国史学研究室より史料寄贈。 |
| 1.27 (金) | 山口宗之名誉教授より史料寄贈。 | 4. 5 (水) | 大学史料室南側入口扉取付。 |
| 1.31 (火) | 渡辺公一郎工学部助教授より史料寄贈。 | 4. 6 (木) | 「大学史料室への印刷物の送付について(依頼)」発送。 |
| 2. 1 (水) | 兼任教官発令(～1997.1.31)。
佐伯弘次文学部助教授
新谷恭明教育学部助教授
植田信廣法学部教授
有馬 學比較社会文化研究科教授
東定宣昌石炭研究資料センター教授 | 4.13 (木) | 第11回専門委員会。
吉村徳重法学部元教授、植田信廣法学部教授より史料寄贈。 |
| 2. 6 (月) | 工学部図書掛より史料受領。 | 4.20 (木) | 第12回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
平成7年度大学史料室振替予算要求書提出。 |
| 2.13 (月) | 『大学史料室ニュース』第5号原稿入稿。 | 4.24 (月) | 川島健治郎医療技術短期大学部元教授より史料寄贈。 |
| 2.17 (金) | 研究協力課吉田碩専門職員、写真借用のため来室。 | 4.28 (金) | 吉本清一医療技術短期大学部教授より史料寄贈(学士鍋)。 |
| 3. 1 (水) | 工学部甲寅会より史料寄贈。 | 5. 1 (月) | 兼任教官発令(～1997.4.30)。
荻野喜弘経済学部教授 |
| 3. 8 (水) | 企画調査室より史料受領。 | 5. 9 (火) | 平成8年度概算要求各部局説明聴取(有馬學委員長出席)。 |
| 3.10 (金) | 『大学史料叢書』第3輯、『大学史料室ニュース』第5号刊行。 | 5.19 (金) | 吉本清一医療技術短期大学部教授より史料寄贈。 |
| 3.13 (月) | 退官予定教官へ史料寄贈依頼文書発送。 | 5.26 (金) | 企画調査室より史料受領。 |
| 3.16 (木) | 甲木伸一工学部教授より史料寄贈。 | 6. 5 (月) | 予算経理委員会開催(有馬學委員長出席)。 |
| 3.17 (金) | 教官定員運用委員会開催(大学史料室運用定員決定)。
馬場典明文学部教授より史料寄贈。
文学部国史学研究室より史料寄贈。 | 6.19 (月) | 麻生忠二工学部元教授より史料寄贈。 |
| 3.22 (水) | 庶務課より史料受領。
岡増一郎歯学部教授より史料寄贈。 | 6.22 (木) | 学習院大学史料館桑尾光太郎氏、大学史料室視察のため来室。 |
| 3.23 (木) | 衣笠哲生法学部教授より史料寄贈。 | 6.27 (火) | 評議会開催(平成7年度大学史料室予算決定)。
教官定員運用委員会開催(有馬學委員長出席)。 |

九州大学大学史料室ニュース 第6号

発行日 1995年9月20日(年2回刊)

編集
発行

九州大学大学史料室
〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1
電話(092)641-1101 内線2298

Archives of Kyushu University

印刷 九州大学印刷所